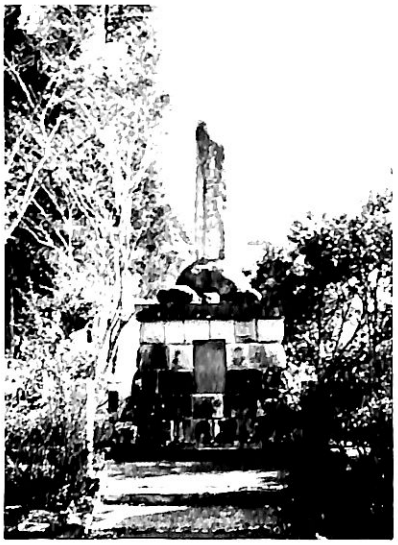
と基本財産の造成官行造林に着工して造成事業の中心となって努力され、現在既に其の価数億に達し土木事業学校建築、其の他諸事業に　貴重な財源として極めて有効に使用されつつある次第で次いで、馬見原水力発電所を創設してその支配人となり阿蘇の山東部一帯僻地に初めて電灯を点じ、住民狂喜して先生の偉大さをたたえ、次いで衆望を負うて県議会議員に選出されるや傑出した政治手腕を発揮して縦横の活躍をされ、郷土発展に日夜心血を注がれた。亦大東亜戦終戦に伴う一大混乱時に際しては、柏村長の重職にあり克く大勢を達観して村民を指導し、その不安動揺を鮮に防止して秩序を確保された。更に農家経済を豊かにする為に畜産と、たばこに重点を指向すべきと長年月に亘り其の向上発展に懸命の努力を傾注された。既ち南阿蘇畜産協同組合長並びに熊本県畜産連合会副会長の職にあること二十年に及び其の手腕及び力量は県下畜産界における第一人者として活躍され為に農林大臣農商務大臣より表彰されること二回に及ぶ。終戦後引き続き南阿蘇畜産協同組合長の職にあり、更



に今や全日本褐毛和牛登録協会副会長を始めとして十数に余る畜産関係の職にあり更に、たばこ関係にて阿蘇たばこ耕作組合長、県たばこ耕作組合連合会長、全国中央会副会長の要職にあり、農家繁栄と福祉のために絶大なる貢献をされつつあり、卓越した識見と不撓の努力と偉大な実績は万人の斉しく敬服し感激するところで、この産業振興に盡粋された功績により黄綬褒賞と云うこの上ない栄誉を得られるに至った。よって先生の高邁な人格徳望と卓越した識見を郷土発展に盡粋された灼熱の意気と不撓の努力に感謝し、且つ極めて顕著な功績を未来に称えんため、遍く賛同を得て此の碑を建つ。

昭和三十六年八月

発起人

議会議員副議長	穴見重雄
たばこ耕作組合柏支部長	後藤大次郎
農業協同組合長	渕野　薫
森林組合長	吉田時光
畜協柏支部長	渕野　薫
議会議員	小屋迫　要
共済組合長	小崎正行
町議会議員	森田成美
仁瀬本神社宮司	後藤松寿

柏農業協同組合理事　　佐藤義晴

二七八　頌徳碑（佐藤常信翁）

所在地　大字二瀬本

公民館入口左側に、自然石の碑が建立されてある。正面に、佐藤常信翁頌徳碑　熊本県知事　寺本広作書と記されてある。

基礎石積（幅二・〇、高一・二二米）、台石三段（下台、幅二・〇、厚〇・二二米、中台、幅一・五〇、厚〇・二五米）、上台自然石（幅一・〇、厚〇・四米）、碑石自然石（下幅〇・六、中幅一・〇、高一・六〇、厚〇・三五米）。

碑　文（銅板）

佐藤常信翁は、安政二年十月八日草部村大字芹口四六一番地に於、父佐藤典次郎、母エキさん夫妻の二男として生まれ、明治七年柏村大字下山、有働石熊氏の養子とならる。翁は少年の頃から頭脳頗る明晰であって、克く学問に励み長ずるに及んで学識衆に優れ、資性剛毅果断にして其の人徳は、夙に近隣の敬仰する処であった。明治二十二年四月初めて町村制が実施せらるるや、初代柏村長に就任、仝二十九年十二月に至る七年九月間に及び越えて、仝四十年七月、再び村民の衆望と期待を一身に荷い、柏村長ら重職に就き再大正十二年八月に至る十有六年四期間前後を通じて実に二十三年九ヶ月の長きに亘って在職し、其の間明治二十九年には第一期阿蘇郡会議員となって、大いに郡政の発展に貢献せられ、又柏村会議員に当選せらるる等正に翁の御一代は、柏村と共にあって柏村政の基礎を確立し村民の福祉増進のため終生専念せられた事蹟は今日枚挙に暇ない処である。殊に、当時の柏村財政は、真に困難であって村民は諸税の負担に苦しみ、村、個人共に困窮の極にあったが、翁は日夜此の事態を憂慮し村を富ますは、植林に然かずと村内先覚の士と相計り村有林や部落分収林の造林計画を樹立し、村民に対し大いに其の植栽を奨励して基本財産の造成に努力せられたが、この時に当たって偶々町村の基本財産の造成を目的とし、且つ村民の植林意識の昂揚を企画した官行造林法が施行せられたので、翁は当村の助役・後藤五郎八、勧業主任・小屋迫　一氏を始めとし、村会議員、村内有志の絶大な協力を得て幾多の困難な問題を解決し、二百四十町歩に及ぶ村有原野に官行造林実施契約締結の基を拓いて、後世豊かな村造りの基礎を確立せられた。今日柏村が県下屈指の基本財産収入を揚げ、戦後飛躍的に

膨張した財政負担の最大の収入源となって新学制に基づく六・三制校舎の建築、村内各部落間の電話の架設、特に交通機関の異状な発達に即応する道路の新設改修、或は各種産業の開発等のため既に巨額の資金が充当され、尚今後、時価数億と称さる官行造林分収金は、長く柏村民福祉の増進と文化の向上に限りない恩沢を与えることと思われるが、これ単に翁の名村長として後世村民のために企画せられた、偉大な御功績の賜であって、村民は挙て感謝の誠を捧げると共に改めて植林の重要性に想いを致し、更に全村緑化の決意を深くするものである。翁は昭和十二年四月二十八日、齢八十三才の天寿を全うし長逝せられた。茲に翁の限りない御功徳を頌え、御人格を偲び其の御偉業を永く後世に伝えんが為、柏村議会の議決を経て頌徳碑を建立するものである。

昭和三十一年九月　柏村長　小崎正行

台石に次の銘がある。

村長　小崎正行、助役　興梠護久

収入役　後藤松寿、前村会議長　吉田時光

副議長　有働　実、議員　田上正行、下間基広、渡辺定光、後藤定一、佐藤　束、大内田今朝義、栗屋　正、佐藤武勇、工藤静雄、工藤源平、玉目虎雄、穴見義雄、工藤忠雄、藤原一正、現村会議長　甲斐克己、副議長　玉目虎雄、議員　後藤　続、栗屋　正、工藤鶴雄、後藤定一、小屋迫　要、佐藤光朝、森田成美、吉田時光、渡辺定光、佐藤　當、穴見重雄、嶋田　清、藤原一正、工藤唯秋

設計監督　後藤義雄、石工　黒川由吉

二七九　顕彰碑（穴見重雄翁）現今存命

所在地　大字大見口

部落内県道左側に、自然石の大きな碑が建立されてある。表面に、穴見重雄翁、官行造林顕彰碑　熊本県知事　寺本広作書とあり、昭和四十三年十二月建立となっている。

基礎石積（下幅三・〇、上幅一・八、高一・六米）台石二段で下は切石（幅一・八、厚〇・二米）、上は自然石で（幅一・八、厚〇・五五米）の上に、高二・四三、幅一・三、厚〇・六五の自然石の碑である。

碑　文

大正十二年一月十日柏村は地方殖産を目的とする官行造林法の趣旨に賛同し、大見口字積前、他十九筆二三七町七反歩の造林契約を、熊本大林区署と締結せるが、当村原野は、畜産振興に関する採草牧野利用問題と競合し、林地利用への転換は容易の業に非らざりしも、先見の明ある穴見重雄、奈須宗三郎、両氏を中心とする地元民の積極的協力を得て、本事業決行の緒に

就いた次第である。雨来、穴見重雄氏は、看守人として凡て五十年の永き歳月に及び、官行造林の植栽管理に献身的努力を傾注され、地元民も亦積極的に協力し、よって大樹林地造成の一大偉業を完遂し得たのである。現今、柏地区が官行造林の収益分収によって、交通の整備、文教施設の充実、産業振興等々、地方発展に偉大なる貢献を遂げつつあることは、感激惜しく能はざるところ、これを後世に伝えんがため碑を建立し、徳を顕彰する次第である。

附　記

穴見翁は、多年に亘り畜産改良振興のため盡粋され、昭和十九年農林大臣表彰を受賞、又柏村議会議員として十七ヶ年、蘇陽町議として十二ヶ年に及び、その間、議長の要職等を歴任、昭和四十二年十月、自治功労により勲六等単光旭日章に叙せらる。

官行造林関係部落及び関係面積

大見口九一・〇町歩、上差尾一〇・〇、玉目八・〇、溜渕一二・〇、稲生四八・〇、目細二七・〇、旅草一〇・〇、柳一五・〇、猿丸一五・五、百枝三・〇、計二四〇・〇町歩

二、史　蹟

二八〇　記念碑

所在地　大字長崎

服掛松と呼ばれているところに記念碑が建立されてある。

この碑は、明治二十六年（一八九三）九月、北白川宮能久親王殿下が「工兵隊野堡術演習御検閲の折に、軍服の上衣を松の枝に掛けられて一時休憩されたことに由来して、服掛松と呼ばれるようになった。

記念碑の題字は、陸軍大将・林仙之謹書とあり、正面に北白川宮能久親王殿下御遺跡とある。これを記念すべく、昭和十一年十一月三十日、在郷軍人会の方々が発起人として賛助員を募り、建立されたものである。横に、賛助員碑も建っている。

この「服掛松」の台地は、東に祖母山、西に大矢野原、南に九州山脈、北に阿蘇五岳を遠望し、風光明媚にして、雄大なる南阿蘇の高原美が満喫でき、四季を通じ旅情を慰めている。

二八一　国境標石

所在地　大字長崎（加世群）

旧国道沿いの、加世群部落より東へ、旧国界の境の松、跡へ進む鏡山峠迄は、道幅二米のゆるやかな野道を約二百米程で、杉林に入り、鏡山峠の地点で六六六・二米の水準点がある。このあたり黒曜石の岩石の小石道で少し下れば国境の境の松跡である。その松は今はなく、杉林がなければ南阿蘇外輪の原野を一望に眺められる景勝の場所である。

昔此のところに茶店があり、今は竹林となっている。竹林があることは人家の跡の証査でもある。又近くに泉が湧き出て、休憩場所でもあった。国境地点には台石とも〇・六米程の墓石形の標石がある。これは、矢部猿渡村・寿助の建立で、日向岩上村の若者が建立に加勢していることが刻まれている。岩上村は、現在の宮崎県の岩神部落のことで、峠を下った麓の村のことである。

文化六年（一八〇九）鏡山の中腹杉林中に祀ってある、あくた神に献じたものである。

それには奉寄進と刻まれてある。この国境の「鏡の松」跡の地より鏡山頂上南へ、約二〇〇米の所に、あくた神の祠がある。又、国境線上道より九〇〇米南が、鏡山頂上になるが、一里木、加世群、鏡山部落一帯にかけては、明治十年の西南戦争の激戦地があった所である。国道改良により二一八号線は峠の北側約一粁の地点を通過して、宮崎県内に入るが、県境を越えた鏡山東面に、元日本窒素KKの廻渕鉱山があり、昭和四十年頃迄は、鉱山に通う従業員が数十人余り、この国境を徒歩で通勤していた思い出の多い地点である。

標石（台石、幅〇・四二、厚〇・一六米）、碑（高〇・四四、幅〇・二三米）のは切石

国界の標石

東	西	南	北
岩上村 加セイ ワカイモノ中	ひこやへ 立主 さわたり寿助	ひこ 石工　弥八	文化六巳年 奉寄進 正月吉日

二八二　国界夫婦岩（自然石）

所在地　大字長崎（加世群）

一里木跡から旧国道に、栃原小川の谷を越し道より坂は低く下って谷川を登ったところに僅かながら水田がある。坂道は拡幅改良舗装されて、中途に夫婦石（メオト）がある。

国誌草稿、馬見原町の項に「当町ヨリ日州県ヘノ通筋、夫婦（メウト）石境マテ十八丁十六間アリ」と記され、南部馬見原原之図にも、夫婦岩のヶ所が示されてある。夫婦石は、両側に弐個並んでいたのが、道路整備によって西側の石は埋没した。現在東側に残っている石は、横二・四米、高さ一・七米で、片方だけであるが、往時、日向の方々が三斉市、六斉市が開かれる馬見原へ、又肥後の人々が日向への名所巡りに、尚馬見原駄賃引きの馬方さんが、或いは旅人の往来において此の国境の夫婦石の様に末むつまじく、仲良くありたいものと語り乍ら……又旅の安全を祈願し、ナデ乍らサスリ乍ら、様々な思いを秘め、追分などを口ずさみ唄い、往来された心情が今さら乍ら思い察せられるようです。

国誌や南郷之図にも記録されている、貴重な夫婦岩であり、大事に保存したいものです。

二八三　会所跡碑

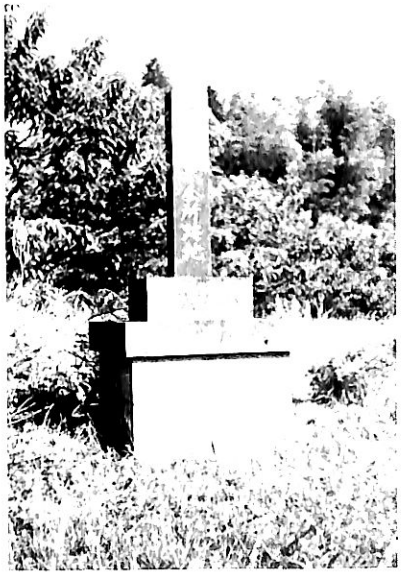
所在地　大字菅尾（前）

佐藤商店前に、菅尾手永会所跡の碑が建立されてある。基礎ブロック積（幅〇・七〇、高〇・五五米）、台石二段（下台幅〇・八二、厚〇・一五米、上台幅〇・五二、厚〇・二一米）、碑石（幅〇・一九、高一・〇、厚〇・一一米）裏面に次の碑文が刻まれてある。

碑　文

菅尾手永大総庄屋兼代官所を手永会所と称し、寛文十年（約三〇〇年前）肥後国主、細川公となり、米山号を廃して菅尾号と改称、郡代の指揮のもとに管内の政務を司ってきた。

禄高六、二一九石八斗六升二合三勺と云われ、



県下でも大きな手永であり、実に当時の六十ヶ村（旧馬見原町、菅尾村、柏村、小峰村一円）を明治の初めまで統制された由緒ある土地である。

二八四　柏城（二瀬本城）趾碑

所在地　大字二瀬本

城趾の頂上部に、磨石の高さ一・六五、下部台石幅二・〇、上部碑石は（幅〇・六三、厚〇・二四、高〇・四八米）の碑石が建立されてある。

碑　文

柏城趾ハ永禄、天正ノ頃阿蘇家ノ家臣、柏民部大輔居城ス、天正十四年正月島津勢、高千穂勢高森攻落ノ際落城ス、城主柏民部大輔当時矢部浜ノ館ニ出仕中ナルモ事ノ急ナルヲ聞キ急ギ帰城スルモ城既ニ落チ憤懣ヤル方ナク、高森ニ敵将新納武蔵守ヲ求メ西郊十里山の辺ニテ討死ス、蘇陽町合併前当地区ヲ柏村ト称セシガ此ノ名称モ城主柏民部大輔ノ長年月ニ亘ル善政ヲ敬慕スル余リ住民が村名トシテ名付ケシモノニシテ此ノ城趾近クニハ当時ノ激戦ヲ物語ル刀剣矢玉等出土シ、近クニハ、千人塚モ存ス、又此ノ附近ノ地名ヲ血盛（チモリ）ト称シシテ墓所ニハ当時ヲ追想シ香煙ノ立上ルヲ見ル。

と記されてある。

三、忠魂碑等

二八五　所在地　大字馬見原

小学校校庭に、忠魂碑が建立されてある。正面に忠魂長存、峯九十一囲　明治三十七、八年戦役。昭和二十八年四月建立とある。

碑　文

明治三十七、八年戦役並びに日支事変に於ては、赫々たる国光を世界に発揚したる我が国が、昭和十六年勃発の大東亜戦争は、その主旨因より自存自衛の動機でありたるにも不拘有史以来未曽有の不幸と屈辱とを招来せり。然るに過去の戦役に大命を奉し、壮途につきたる勇士、身は戦野に斃れて今は亡く忠魂故郷に静かに眠る。而して我が馬見原町は、明治以来の戦役に犠牲となりたる本町出身の英霊百十九柱を、永久に讃え弔わんことを希願い町民一同議してこの碑を建立す。

昭和二十八年四月建立

基礎（石積下幅二・二五、上幅一・五四、高一・五二米）、台石三段（下台幅一・六五、厚〇・二九、中台幅一・二三、厚〇・三、上台幅〇・六四、厚〇・四六米）。碑（幅〇・五四、長一・五五米）。全長四・一二米の碑である。

二八六　所在地　大字馬見原（鏡山）

鏡山頂上（標高九一六米）に、明治十年（一八七七）西南役による戦死者の慰霊碑が、熊本市高橋町在住の史家、江藤政光氏が発起人として、郡内町村長、五ヶ瀬町内の篤志家等の寄附により、昭和四十四年九月五日に建立されてある。（碑石、自然石高二・〇米、台石三段（高一・六六米）。

碑の裏に「星霜移り変われども　青葉の野辺をくれなゐに染めて散りにし　つはものの　哀れを秘めし鏡山」と、当時を偲び、江藤政光氏の詩が刻まれてある。

碑の横に、副碑が建立されてあるが、官軍並びに、薩軍の戦死者の氏名、年令が記されてある。

又北面に

亡き人をせめて弔らへ雪月花
　はた蟬時雨　嶺の松風
祖国日本は元より
　悠久の世界平和を念じつつ
大阿蘇の山の煙のとこしへに
　絶えざる如く　後の世に
真心こめて残す　石ぶみ
　世人此の碑を　瞻仰
尚且四囲を俯瞰して
　暫し往時を追懐せられむ事を

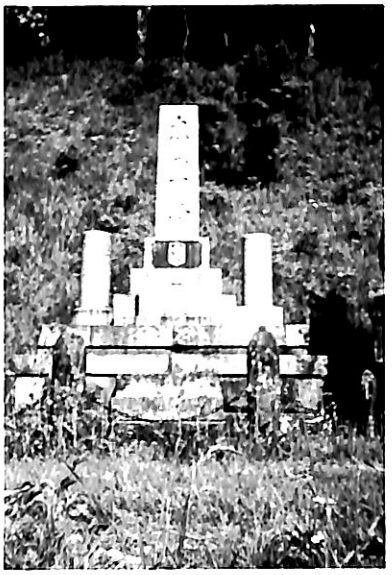
書　馬見原　田中萬次
石工　長陽村喜田　増田七義
発起人　熊本市　江藤政光

と記されてある。

二八七　所在地　大字菅尾（大久保）

菅尾小学校プール場の上部に建立しあり。昭和五十七年四月吉日、補修工事がなされ、旧菅尾村出身の戦死者、歩兵少尉、勲七等功六級、倉岡徹道（明治三十七年十二月一日）外六十一柱の英霊を合祀してある。

本塔は、初め、在郷軍人会で昭和十八年に建立され、終戦の時取りこわし、後、昭和二十三年再建されたが、其の後一部破損せしをもって、昭和五十七年四月に補修再建された。



補修工事費　二十三萬円也

協力　蘇陽町及び郷友会

請負者　矢部町上川井野　山下学石材店

菅尾遺族会会長　田上惟雄

地区世話人

元菅尾・塩原　中林かずの

塩出迫　佐藤　敦

米山、大迫、大久保　山村　五雄

今・八木　田上　憲一

花　上　富永　光芳

会計　岩下　誠策

昭和五十七年四月吉日と銘あり。

基礎（幅二・四五、高〇・七二米）、台石四段（高一・三〇米）、碑石（高一・五二米）全長三・五四米の碑である。

二八八　所在地　大字長谷

小学校校庭横に、忠魂碑が建立されてあり、元帥子爵　川村景明書とあり。

左面に西南、日清、日露、シベリヤ、大東亜戦争の戦没者の氏名が刻まれ、碑石裏面に次の碑文が記されてある。

里人胥課建石為、西南、日清、日露、西伯利四役陣歿戦士之碑欲勒其功以伝千載嘱予文銘曰

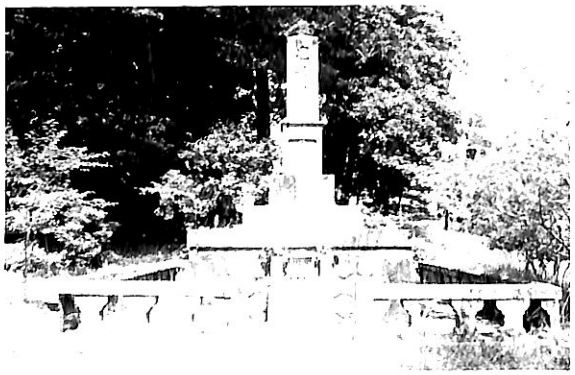
高千穂峰巍々聳千秋。五箇水滚々流九垠。

是功是烈赫奕亜萬古忠魂毅魄凛乎護皇基

大正十五年三月十日

陸軍少將正五位勲三等功三級

二子石官太郎撰竝書

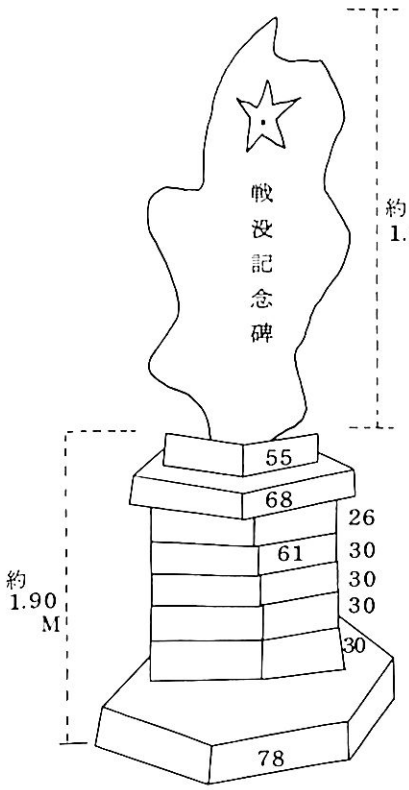


碑全高五・二米（基礎幅三・一七、高一・〇五米、台石三段

（下台幅一・八〇、高〇・三八米、中台幅一・〇五、高〇・五四米、上台幅〇・六〇、高一・〇米）碑高一・八〇、幅〇・五四米）

二八九　所在地　大字滝上（下番）

加藤社の石段中途に、洋式風で、高さ（台石共三・八米、幅〇・七米）台座幅〇・七八米の五角型で周囲は鉄の鎖で廻してあったが、鎖は戦時中供出されて、今は柱のみが立っている。



碑文は読みとれないが、大正時代、町内の商家等の方々が出資して建立されたものと云われている。

日露戦役大勝を記念して、建立されたものであろう。

二九〇　所在地　大字菅尾（前）

菅尾老人憩の家前広場に、明治三十七、八年日露戦役記念之碑が明治四十一年九月十日に建設されている。

碑文は、陸軍大将　従二位　勲一等功一級　伯爵　奥　保謹書とされてあり、台石には、

凱旋軍人　陸軍二等軍医　勲六等　従七位　山村五夫　外三十六名の方が記名されてある。

又此の碑建設の周旋方兼寄附人名として

菅尾村長　勲八等　山中久米八　外二十名

今村乙八外　五十八名

菅尾村青年会員

今村婦人会、とあり

石工　御嶽村　山下政□

と銘がある。

碑の基礎石積（下幅二・二五、上幅一・四五、高一・二八米）、台石三段で（下台幅一・四八、厚〇・一八、中台幅一・一三、厚〇・三四米、上台幅〇・八、厚〇・三七米）碑は自然石

（幅〇・六、高二・二九米）全長四・四六米の碑である。

四、学　校

二九一　百年碑

所在地　大字馬見原

小学校校庭に、小学校創立百年碑が建立されてある。碑石正面に、創立百年碑　馬見原小学校　昭和五十年十一月建立　卒業生一同、とある。自然石で全長約四・五米の碑である。基礎二段で下段（幅四・〇米）、中段（幅三・一五、厚〇・六米）の上に、玉混台石で（下幅二・三五、上幅一・五、高一・六五米）。上段の台石も自然石で（幅一・八、厚〇・六米）、その上に碑（下幅一・一〇、高一・二米）が建っている。基礎の中にタイムカプセルが埋蔵されてあり、蓋石に次の銘あり。五十年後に又百年後に開扉された時、時代の移り変わりと想い出が語り合われることであろう。

小学校の沿革

明治八年　公立馬見原小学校開設

明治三十三年六月　高等科併設さる

昭和十八年四月　長崎分教場五・六年生児童本校通学なる

昭和二十四年二月　合世帯の馬見原中学校が下鶴の新校舎に移転

昭和二十五年四月　学校造林優秀につき文部大臣より表彰を受く

〃　二十七年二月　長崎分校校舎新築落成

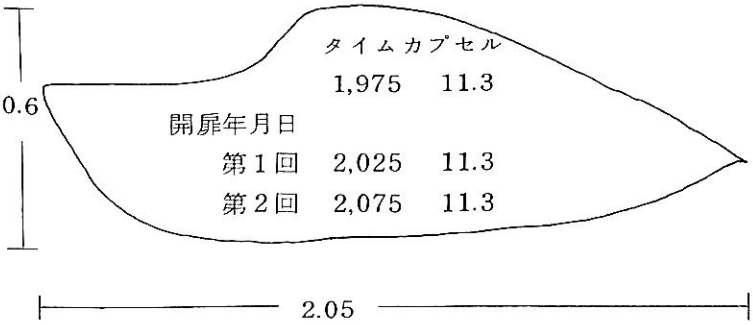
〃　三十一年九月　町村合併により蘇陽町立馬見原小学校と改称する

〃　三十二年九月　完全給食開始

〃　四十二年一月　体育館落成

昭和五十年十一月　創立百周年記念事業として建立す

現在迄卒業生　延四、六一一名



想い出

明治の初め教育制定と共に、当馬見原小学校も明治八年発足し、本年百周年を迎える事になりました。幕末から明治の初めにかけて、馬見原は林産物等の集数地として大変栄え、土蔵三階建ての大家高楼が軒を並べ、酒醸業者だけでも十三軒もあった事をおぼえて居ます。幕政時代は、延岡城主内藤藩の行列が馬見原を通る時は、敬意を表する為、行列の毛槍を倒して通って居た由、内藤藩の台所に馬見原財閥の力が如何に強かったかを物語る一例です。そんな馬見原も交通の便が良くなって、九州中央の集数地としてのかげが薄れると共に、昭和になってから急に淋しくなりつつあります。又小学校にしても、生徒数も次第に減少をたどっています。

今、百周年を迎えるに当たり、卒業一同が力を合わせ、往時の馬見原のように発展さすべく、努力して頂きたく、念願するものであります。

（明治四十四年卒業生）

二九二　記念碑（学校林）

所在地　大字馬見原（一里木）

馬見原小学校学校林と記された記念碑が、旧国道右側に建立されてある。この碑は、明治三十八年、当時馬見原小学校校長一木重馬先生が、明治三十年着任後、校舎建替を役場及び町の有志に働きかけ苦労されて、校舎建築が出来たが、将来又校舎の立替があることを予想され、その時の校長が、再び苦労されないようにと、学校林を造成してはとの意見に、当時、町内で材木商をして居られた、飯干唯平さんが聞かれ感動され、自分の山を一木校長に差し上げられ、明治四十年に植林した杉材が戦後、中小学校の材料に使うことが出来たのです。現在、学校林の中にある大杉は、当時の杉の残り木です。戦後、文部省で模範学校林の表彰が行われた時、全国で一番目に表彰を受けることが出来たのです。一木校長のその徳を称え、又学校林の重要性を鑑みて、建てられたものです。

碑石（高一・三〇、幅〇・五四米）

台石二段（上幅〇・八五、高〇・二二米、下幅一・二〇、高〇・五米）

碑　文

学校林沿革

一木重馬校長ハ、明治三十年カラ十七年間ノ長イ間、本校校

長トシテ在職サレ、着任早々ノ校舎建築ノ苦心ヲ将来二度と繰リ返サナイヨウ、五十年後ノ学校改築ノ事ヲ考ヘラレ、生徒ト共ニ、此ノ地ニ植林サル。ソノ山林ガ、四十数年後ノ、昭和二十一年ノ学生改革ニ依ル、中学校建築材トシテ使用サレ、又同二十四年ニハ、小学校迄改築サレシハコレ偏ニ、一木校長ノ先見ニヨルモノニシテ二十三年ニ、特ニ全国ノ模範学校林トシテ、文部大臣ヨリ表彰サル。一木校長ノ徳ヲ讃ヘ、PTAニテ記念碑ヲ建設ス。

表　彰　状

熊本県阿蘇郡馬見原町立
馬見原小学校

貴校は多年、学校林造成に盡力し学校植林運動に貢献するところ多大である。

よってこれを表彰する。

昭和二十五年四月一日

文部大臣　高瀬荘太郎㊞

二九三　百年碑

所在地　大字大野

小学校体育館横に、六角型、上部は円型の碑が建立されてある。頭部の円型に、大野小学校創立百周年記念、西暦一九七五と銘ある。基礎はコンクリートで、幅一・五〇、厚〇・一〇米の四角、台座六角で、一辺〇・五、厚〇・一五米、面上に校下部落名（白石、大野、方ヶ野、柳井原、土戸、神の前）が記されてある。碑石も六角で、長一・三二、一辺〇・二一米で、上部に径〇・五米、厚〇・一五米の円型になっている。（全長二・〇七米）

その横に碑文が記されてある。

碑　文

大野小学校創立百周年に当たり、校下総意のもとに、この碑を建立することになり左記構図により設計した。創立以来の卒業生は一、三一九名で、明治時代一六八名、大正時代一七八名、昭和時代（昭和四十九年迄）九七三名を数える。

依って此の碑の六角塔の高さは一、三一九粍で、卒業生総数を表す。中間の区切りは、各時代の卒業生数の比を示したものである。又六面は、校下の六部落を表すもので、頂頭の円型の

中心の周囲の長さの和は、一、三一九粍で、六部落の卒業生全員で支えられ、特に和を強調する。尚、台座より頂上迄の高さの和は、一、九七五粍で建立の年、西暦一、九七五年（昭和五十年）を意味する。

昭和五十年七月建立

（碑の裏面）　百周年記念事業

期成会長　斗高俊治

副会長　園田正隆・中村一男

会計　後藤繁・伊藤透

監事　倉岡仁平・枝尾留雄

総工事費　四拾万円

題字　現校長　長谷川静成

設計者　栗屋守

石工（熊本市）橋口武幸

小学校の沿革

明治七年　大字柳井原字文字ヶ崎に柳井小学校開校

〃　二十年　柳井小学校廃校、大野、柳井原、土戸の三区は、馬見原小学校へ通学、白石、方ヶ野、神の前の三区は、白石谷校舎を設置、馬見原小学校支校と改称

〃　二十三年二月　大野に校舎新築。馬見原小学校大野支校と改称

〃　二十五年四月　独立して大野尋常小学校と改称

昭和三年三月　大野小学校の造林地を定め植林を行う

〃　十六年四月　大野国民学校と改称

昭和二十二年四月　馬見原町立大野小学校と改称

〃　四十八年三月　体育館本体完成

〃　五十年八月　大野小創立百周年記念式典　記念碑建立

二九四　百年碑

所在地　大字菅尾

小学校校門左側に、昭和五十一年三月、創立百周年記念事業として建立されてある。

碑文

小学校の沿革

明治八年五月　公立菅尾小学校創立

〃　二十三年六月　今村の地に今村分教場設置

〃　三十二年七月　花上の地に花上分教場設置

大正十一年四月　小学校に高等科を併設される

〃　十一年十二月　元菅尾の校地を現在の大久保部落に移し新校舎建設と同時に、今村分教場を廃止する。

昭和十一年九月　小学校教室および講堂増築
〃　二十七年七月　第二校舎増築
〃　三十五年四月　町村合併に伴い、花上分校は、二瀬本小学校分校と所属変更
〃　五十一年三月　体育館落成
〃　五十一年三月　創立百周年記念事業として建立する。

現在迄の卒業生　延二、二六四名と記あり。

基礎石積（幅二・八〇、高一・五五米）、台石二段切石（下幅二・一五、厚〇・一五米、上幅一・九〇、厚〇・二八米）、上台石、自然石（幅二・四、厚〇・五五米）、碑石、自然石の（下幅〇・九、上幅一・二〇、厚〇・四〇、高二・六五米）。全長五・一八米の碑である。

二九五　記念碑（元中学校）

所在地　大字菅尾

菅尾保育所入口に、昭和五十五年四月、町内四中学校の統合に伴い、菅尾中学校廃校となり、その跡地に記念の碑を建立されてある。

「碑　文」

菅尾中学校沿革抄

昭和二十二年六月　馬見原中学校菅尾分校創設
〃　二十三年九月　現在地に新校舎落成
〃　二十六年九月　菅尾村立菅尾中学校として独立
〃　三十一年九月　蘇陽町立菅尾中学校と改称
〃　五十五年三月　菅尾中学校閉校に伴い発展的閉校

この歴史、正に三十三年、幾多の変遷を経ながらも、卒業生を送り出すこと、分校時代一〇四名、独立後七九二名、計八九六名に及ぶ。ここに母校菅尾中学校を偲び愛惜の情を後世に残すため、記念の碑を建立す。

昭和五十五年三月

菅尾校区民一同

菅尾中学校校歌

一、阿蘇の高領の白雲や
遠くにつづく山脈へ
静かに映ゆる四季の色
我等を生みし故郷は
ああうるわしきわが菅尾

二、朝に固む　若い夢
夕に思う　わが心
たがいの胸に誓いあう
自主勤労のこの教え
ああうるわしきわが学び舎

三、蘇陽の峡の水すみて
渡る緑の　五月風
燃ゆる血潮は高らかに
国を興さん希望あり
ああうるわしきわが母校

基礎（幅一・七、高〇・七米）、台石二段（下幅一・八二、厚〇・一三米、上の幅一・四〇、厚〇・二四米）　碑石（幅一・四五、高〇・六五米）の碑である。

二九六　百年碑

所在地　大字二瀬本

校舎中庭に、小学校創立百周年記念碑が建立されてある。自然石に、創立百周年記念、昭和五十三年一月と銘あり。

基礎自然石、玉名石コンクリート（幅二・二〇、高〇・六二米）、碑石自然石（高一・五〇、上幅〇・七七、下幅一・〇米、厚約〇・四五米）　全長二・一二米

二瀬本小学校沿革

明治十二年一月　二瀬本簡易科教場開設
〃　二十五年　二瀬本尋常小学校と改称する
〃　三十一年　橘小学校（下山・橘・樺山）分離
昭和十六年　二瀬本国民学校と改称する
〃　二十年　高等科設置
〃　二十二年　二瀬本小学校と改称する

〃　三十五年　菅尾小花上分校が本校の分校となる
〃　四十三年　体育館建設
〃　五十年　新校舎落成
〃　五十三年　創立百周年記念式典

二九七　百年碑

所在地　大字長谷

小学校校舎正面に、創立百周年記念の碑が建立されてある。基礎（高〇・九、幅二・一五米）、台石（幅二・二三、厚〇・一五米）の上に、横型の碑で、横一・七三、縦〇・六六、厚〇・三米あり、正面基礎面に、玉目利保氏作詞作曲の校歌が記されてある。

校　歌

一、世界に誇る　大阿蘇を
　朝な夕なに　仰ぎみる
　豊けき文化　咲く園は
　その名輝く　長谷校

二、伸びゆく若き　清純の
　希望の胸は　ふくらんで
　楽しく語り　学び合う
　その名輝く　長谷校

三、愛と平和の　旗風に
　わがふるさとの　声を聞き
　光の道を　ふみゆかん
　その名輝く　長谷校

長谷小沿革誌

一、明治十年十一月　本村工藤市之十氏の農家の座敷を借用し長谷授業所として創立される。
一、明治十二年四月　本村役場の変更上廃家となり大字長谷字小堀一二六番地に移転する。
一、明治二十年二月　長谷簡易科教場と改称される。
一、明治二十五年四月　長谷尋常小学校と改称される。
一、明治四十五年　現在地に校舎新築される。
一、明治四十五年四月　高等科併置され長谷尋常高等小学校と改称される。
一、昭和十一年六月　高等科を二学級に編成する。
一、昭和十二年三月　高等科第三学年を設置する。
一、昭和二十年四月　教育制度改正（六、三、三、四）により柏中学校設置につき高等科廃止となる。
一、昭和三十一年七月十四日　新校舎落成する。
一、昭和三十一年十月一日　町村合併により蘇陽町立長谷小学

校となる。

一、昭和五十二年三月二十一日　長谷小学校創立百周年記念式典を挙行。　以上

会　長　田上都喜雄
副会長　興梠直彦　工藤　泉　佐藤義人　佐藤　靖
施設委員長　春日　協、顕彰委員長　春日據英
式典委員長　春日鉄男、顧問　佐藤　東　春日孝雄　工藤　進
工藤　香　工藤鶴雄　玉目鉄雄　工藤安雄　佐藤功一
会長　工藤光盛　佐藤　厚　春日武士
書記　玉目則房、監査委員　山村喜久夫　田上辰男　佐藤　功、
学校長　藤田悦三郎、教頭　渡辺昭悟、教諭　福田正行　江藤淳一　井更子
外校下民一同の記名あり。
施工　本校卒業生　波野村滝水　井上敏男

二九八　百年碑

所在地　大字上差尾

小学校校庭入口左側に、上差尾小学校創立百年を記念して、碑が建立されてある。

碑正面に、上差尾小学校、蛍雪百年之碑　昭和五十四年九月建立　熊本県知事　沢田一精書と刻まれてある。

基礎（幅約一・〇　高約〇・八、厚約一・〇米三石）、碑石（幅三・三五、高一・二〇、厚〇・八五米）。基礎、碑石共に大きい自然石である。

百年碑の前に　百周年記念塔が建立されてある。

四面に　東　北緯　三二度四十八分
東経　一三二度　八　分
西　創立百周年記念
昭和五十四年九月
南　標高　六六三米
北　蘇陽町大字上差尾
一、〇二七番地

下部に、タイムカプセルが埋設
昭和五十四年九月十日
西暦一、九九九年九月開蓋　二十年後
西暦二、〇二九年九月開蓋　五十年後　と　銘がある。

沿　革

明治十四年八月　本校は此の年、興梠千代蔵の地所を借り校舎を新築し後、明治十八年柏村に属し、明治十九年上差尾小学校と改称する。

明治三十九年二月　弘道会設立　会長興梠市三郎。

昭和十六年四月　国民学校制度により上差尾国民学校と改称。
昭和二十四年九月　校庭拡張作業延三七二名、面積三〇〇坪
昭和三十四年四月　五学級編成認可
昭和三十五年四月　六学級編成認可
〃　六月　給食実施開始
昭和四十一年六月　弘道会を解散し、校下後援会に全財産を引き継ぐ。
昭和五十四年九月　創立百周年祭

二九九　記念碑（元小中学校）

所在地　大字東竹原

元東竹原小学校の校庭に記念碑が建立されてある。

台石（幅一・八五、高〇・八三）の上に中台石（幅一・四、厚〇・二九米）、碑石（幅一・五九、高〇・七二、厚〇・四米）。

正面に、東竹原小中学校の跡、米納三雄謹書とあり、下の台石に「山深く住む幸せのひとつにてしらいと草のやさしさも知る」三雄と銘あり。裏面に由来記が次の通り記されてある。

由来の記

小学校

明治十三年此の地に移転（一八八〇年）
昭和二十八年四月　校舎改築
昭和五十四年　東竹原二百八十五番地に新築移転

中学校

昭和二十二年四月　柏村立柏中学校東竹原分校創設
昭和二十六年八月　新校舎落成
昭和三十六年四月　蘇陽町立東竹原中学校として独立
昭和五十五年三月　蘇陽中学校発足（一九八〇年）により閉校
昭和二十二年以降の卒業生
七百六十三名
昭和五十五年三月建立
校下民一同

三〇〇　記念碑（長谷小九十周年）

所在地　大字長谷

小学校校庭南側に、碑が建立されてある。

長谷校九十周年記念碑　明治十年十一月創立、昭和四十六年二月十一日、長谷校下民建立と銘あり。